

# 第42回（2025年度） 渋沢・クロードル賞 公募のお知らせ

日仏会館は1984年、創立60周年を迎えたのを機に、創立者の渋沢栄一とポール・クロードルを記念して、渋沢・クロードル賞を創設いたしました。これは日本とフランス（およびフランス語圏）において、それぞれ相手国の文化に関してなされた若手のすぐれた研究成果に対して贈られるものです。

双方でそれぞれ1名が受賞し、受賞者には日本・フランス（または研究対象となったフランス語圏地域）間の往復航空券と、相手国での1ヶ月間の滞在費が贈呈されます。

本年度も本賞のほかに日本側では奨励賞が1件用意されており、賞の内容は概ね本賞に準じます。

今年度日本側では下記の要領でこの賞の候補を公募します。

今年度から導入された重要な変更点が二つあります。第一に、候補者の年齢が「45歳以下」から「50歳以下」に引き上げられました。第二に、候補作品は2ヶ年にわたって審査対象になります（昨年〔2024年〕の応募作は今年度の審査対象になります）。ただし、2年目に51歳となる著者の作品は2年目の審査対象とはなりません。

## 審査対象作品 ―― 以下の3条件を満たすもの。

1. フランス文化、フランス語圏文化に関わるもの。
2. 人文科学、社会科学、自然科学の諸分野で、日本の読者の関心に応えるものとして紹介するにふさわしい研究業績。
3. 単独の著者による日本語の著作、またはフランス語の書籍の単独訳による邦訳書。（フランス語の著作は対象外とする。）

## 候補者の年齢

2025年12月31日で50歳以下の方

## 対象作品の出版時期

2023年4月1日より2025年3月31日まで

ただし、2年目の審査対象となる作品については、2022年4月1日より2024年3月31日まで

宛 先 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿3-9-25 日仏会館内 渋沢・クロードル賞係  
(電話 03-5424-1141)

## 提出書類

- ・応募書（書式は日仏会館ウェブサイト (<https://www.fmfj.or.jp/prix-shibusawa-claudel.html>) よりダウンロード。）
- ・候補作品3部（翻訳の場合は原書も1部添付。原書は返却しますが、候補作、応募書類は返却しません。）

締 切 2025年3月31日（月）必着

発 表 読売新聞紙面及び日仏会館ウェブサイトにて6月下旬に発表予定

表彰式 2025年7月4日（金）16時 日仏会館ホール

主催＝日仏会館 読売新聞社

協賛＝公益財団法人渋沢栄一記念財団

学校法人 帝京大学

後援＝在日フランス大使館

## 渋沢・クロード賞 第25回～41回受賞者

### ●2008年度

[日本側] — 川嶋周一 『独仏関係と戦後ヨーロッパ国際秩序—ドゴール外交とヨーロッパの構築 1958—1969』の著作  
— 高村学人 (特別賞) 『アソシアシオンへの自由—<共和国>の論理』の著作  
[フランス側] — ギブール・ドラモット 「日本の防衛政策の決定要因と政治ゲーム」の博士論文

### ●2009年度

[日本側] — 藤原貞朗 『オリエンタリストの憂鬱—植民地主義時代のフランス東洋学者とアンコール遺跡の考古学』の著作  
— 林 洋子 (特別賞) 『藤田嗣治 作品をひらく 旅・手仕事・日本』の著作  
[フランス側] — カリン・プベ 『LES JAPONAIS 日本人』の著作

### ●2010年度

[日本側] — 互 盛央 『フェルディナン・ド・ソシュール—<言語学>の孤独、「一般言語学」の夢』の著作  
— 陳岡めぐみ (特別賞) 『市場のための紙上美術館—19世紀フランス、画商たちの複製イメージ戦略』の著作  
— 田口卓臣 (特別賞) 『ディドロ 限界の思考—小説に関する試論—』の著作  
[フランス側] — クレール=碧子・ブリッセ 『文章と絵画の交差点で』の著作

### ●2011年度

[日本側] — 重田園江 『連帯の哲学I—フランス社会連帯主義』の著作  
— 伊達聖伸 (特別賞) 『ライシテ、道徳、宗教学—もうひとつの19世紀フランス宗教史』の著作  
[フランス側] — ニコラ・ポーメール 「日本酒—日本固有の歴史、文化の地理学」の博士論文

### ●2012年度

[日本側] — 小田 涼 『認知と指示—定冠詞の意味論』の著作  
— 高山裕二 (特別賞) 『トクヴィルの憂鬱—フランス・ロマン主義と〈世代〉の誕生』の著作  
[フランス側] — マチュー・セゲラ 「ジョルジュ・クレマンソーと極東」の博士論文

### ●2013年度

[日本側] — 吉川順子 『詩のジャポニスム—ジュディット・ゴーチエの自然と人間』の著作  
— 小島慎司 (特別賞) 『制度と自由—モーリス・オーリウによる修道会教育規制法律批判をめぐって』の著作  
[フランス側] — クレア・パタン 「日本美術市場の社会的アプローチ—美術品の販売、流通、普及、価値形成のための仲介業者ネットワーク」の博士論文

### ●2014年度

[日本側] — 泉美知子 『文化遺産としての中世—近代フランスの知・制度・感性に見る過去の保存』の著作  
— 橋本周子 (特別賞) 『美食家の誕生—グリモと「食」のフランス革命』の著作  
[フランス側] — ノエミ・ゴドフロワ 「古代から19世紀初頭までの蝦夷地をめぐる交流、支配と対外関係」の博士論文

### ●2015年度

[日本側] — 大森晋輔 『ピエール・クロソウスキー—伝達のドラマトゥルギー』の著作  
— 安藤裕介 (特別賞) 『商業・専制・世論—フランス啓蒙の「政治経済学」と統治原理の転換』の著作  
[フランス側] — フランク・ミシュラン 「太平洋戦争直前の仏領インドシナと日本の南進」の博士論文

### ●2016年度

[日本側] — 小門 穂 (特別賞) 『フランスの生命倫理法—生殖医療の用いられ方』の著作  
— 森千香子 (特別賞) 『排除と抵抗の郊外：フランス「移民」集住地域の形成と変容』の著作  
[フランス側] — マルタン・ノゲララモス 「日本の村落社会におけるカトリック教と潜伏キリシタン(17~19世紀)」の博士論文

### ●2017年度

[日本側] — 渡辺 優 『ジャン=ジョゼフ・スラン—七世紀フランス神秘主義の光芒』の著作  
— 宮下雄一郎 (奨励賞) 『フランス再興と国際秩序の構想—第二次世界大戦期の政治と外交』の著作  
[フランス側] — アルノ・グリヴォ 「日本の政治体制の再編—1990年代以降の政治システムにおける官僚制」の博士論文

### ●2018年度

[日本側] — 新居洋子 『イエズス会士と普遍の帝国—在華宣教師による文明の翻訳』の著作  
— 鳥山定嗣 (奨励賞) 『ヴァレリーの『日詩帖』—初期詩篇の改変から詩的自伝へ』の著作  
[フランス側] — リュシアン=ロラン・クレルク 「日本におけるアイヌの社会文化的変容」の博士論文

### ●2019年度

[日本側] — 石川 学 (奨励賞) 『ジョルジュ・バタイユ—行動の論理と文学』の著作  
— 梅澤 礼 (奨励賞) 『囚人と狂気—19世紀フランスの監獄・文学・社会』の著作  
[フランス側] — シモン・エベルソルト 「偶然と共同—日本の哲学者、九鬼周造」の博士論文

### ●2020年度

[日本側] — 御園敬介 (奨励賞) 『ジャンセニスム—生成する異端—近世フランスにおける宗教と政治』の著作  
— 須藤健太郎 (奨励賞) 『評伝ジャン・ユスターシュ—映画は人生のように』の著作  
— 高木麻紀子 (奨励賞) 『ガストン・フェビュスの『狩猟の書』挿絵研究』の著作  
[フランス側] 該当なし

### ●2021年度

[日本側] — 中村 督 (本賞) 『言論と経営—戦後フランス社会における「知識人の雑誌」』の著作  
— 淵田 仁 (奨励賞) 『ルソーと方法』の著作  
[フランス側] — セザール・カステルビ 「日本の新聞記者と新聞社—変化する職業的モデルにおけるキャリアと仕事の社会的分析」の博士論文  
— エドゥアル・レリソン 「神道の軌道と日本の満洲の成立—宗教的な空間化、帝国の拡大、近代神道の成立」の博士論文

### ●2022年度

[日本側] — 船岡美穂子 (本賞) 『ジャン=シメオン・シャルダンの芸術—啓蒙の時代における「自然」と「真実」—』の著作  
— 金山 準 (奨励賞) 『ブルードン—反「絶対」の探求』の著作  
[フランス側] — ダミアン・プラダン 「大規模倭寇の時代—変遷する東シナ海の流通—1350年から1419年を中心に」の博士論文

### ●2023年度

[日本側] — 西村晶絵 (奨励賞) 『アンドレ・ジッドとキリスト教—「病」と「悪魔」にみる「悪」の思想的展開』の著作  
— 佐藤香寿実 (奨励賞) 『承認のライシテとムスリムの場所づくり—「辺境の街」ストラスブールの実践』の著作  
[フランス側] — アルチュール・デフランス 「奈良時代の詩歌文学：中国文学の再創作と日本文学の創作の間」の博士論文

### ●2024年度

[日本側] — 谷口良生 (本賞) 『議会共和政の政治空間—フランス第三共和政前期の議員・議会・有権者たち』の著作  
— 神崎 舞 (奨励賞) 『ロベール・ルバージュとケベック—舞台表象に見る国際性と地域性』の著作  
[フランス側] — エリーズ・ヴォワイヨ 「「写真売ります！」—日本写真における1968年以降のラディカリズム再考—ワークショップ写真学校(1974-1976)の場合」の博士論文